■ 特集 1 ■

特集「《共にあること》と《耳を傾けあうこと》」によせて

三　浦　耕吉郎
（ソーシャル・ディスアドバンテージ班代表）

本特集は、先端社会研究所のソーシャル・ディスアドバンテージ班（SD 班）が 2016 年度に開催したシンポジウムとセミナーの記録です。

2016 年 4 月に発足した SD 班は、いまだ周縁化されている人びと（LGBT、薬害被害者、薬物依存者、病者、特定労働者、障害者、エスニック・マイノリティ、ホームレス、部落差別被害者、災害被災者、高齢者等々）のかかえているソーシャル・ディスアドバンテージ（社会的不利ないし不利益）の解明と、そうした人たちへの支援実践に関する研究をつうじて、「文化的多様性を尊重する社会の構築」に資することをめざして活動しています。

そのためには、まず、社会的な困難や生きづらさを抱えている人たちとの「出会いの場をつくりだすこと」、そして、そこにおいて、彼らの声にじっくりと「耳を傾けること」が何よりも必要であると考えました。

そのような場の一つとして、私たちが赴いたのが京都にあるバザールカフェ。わが班のメンバーである神学部の榎本てる子に導かれて、はじめてバザールカフェを訪れたときの印象は深くこころに残っています。それは、2016 年の初夏のことでした。

京都御所や同志社大学からほど近い古都の一角にあるそのカフェは、ヴォーリズの設計ということもありスパニッシュ・ミッション・スタイルのおしゃれな建築物です。門を入って、建物を迂回して緑に囲まれたオープン・テラスへとむかう木の側道に足を踏み入れたとき、すでに外界とは異なる時間の流れがかすかに感じられた……、というのはちょっと言い過ぎでしょうか。

けれども、午後の光がさしこむカフェで出会った人びと、学校の勉強についていくのが難しいという悩みをかかえたエスニック・マイノリティの少年、夜のイベントの打ち合わせに来た薬物依存症の男性、そして榎本さんやスタッフの方たちをはさんだたわいのない会話のやりとり自体が、私にとって、普段の日常から大きくかけはなれたものであったのはたしかなことです。

また、夜のイベント「ケアカフェばざーる」において、ゲストの男性による HIV 陽性者として薬物にのめりこんでいったご自身の生活史についてのなまなましい告白（インスピレーション・トーク）を耳にした時の奥深い衝撃。その後、その場に居合わせた当事者・福祉関係者・教員・援助職等々の人たちがゲストを囲んでおこなう少人数の対話（ワールド・カフェ）のかもしだす何ともいえない暖かさ。こうした出来事のなかに見出されたのは、まさしく《共にあること》と《耳を傾けあうこと》が凝縮された時間の流れであるように私には感じられたのでした。

それをきっかけに、夏から春にかけて、私たちはしばしばそこでのイベントに参加することになりました。それらのテーマのなかには、〈女性で HIV と精神疾患を抱えて生きるということ〉〈ト

ランスジェンダーとして生きる〉〈同性愛者として生きる〉といったものがありました。（なお、このバザールカフェの設立経緯や、「ゲイ男性・HIV 陽性・薬物依存」の複合的課題をシェアするための当事者グループとしての「サロン・ド・バザール」の活動等については、この特集の最後の白波瀬達也のエッセイをご参照ください。）

さて、このような関心もちながら SD 班中心に企画・開催されたのが、本特集に掲載されているシンポジウム「支援活動から発見されるソーシャル・ディスアドバンテージ－ホームレス支援の現場から－」（2017. 2. 21）とセミナー（共催：社会調査協会）「ライフストーリーとライフヒストリー－『事実』の構築性と実在性をめぐって－」（2017. 3. 14）でした。

シンポジウムには、ホームレス支援の世界においては知らない人はいないというお二方をお招きしました。私自身、正直いって、ホームレス支援の現場がかかえる問題はもとより、そこで生みだされている豊かな「実践知」をまったく認識できていなかったことに打ちのめされました。ホームレスのおっちゃんたちをシェアサイクル起業の担い手に巻き込んだ事例や、行政との根深い対立を奇跡の協同関係へと転化させていった事例など、まさに驚き満載のシンポジウムとなっております。皆さんも、本報告をつうじて、《共にある》支援とはなにか、考えてみてください。

また、セミナーの方は、一見アカデミックな議論の応酬になっておりますが、少なくとも《耳を傾けあうこと》をめぐっては、多様な立場、多様なアプローチがあり、おそらくどれも一定の有効性をもちえていることが明らかにされたように思います。個々の研究者のもつ独自なテーマや関心のもとに多角的な観点からの研究がなされることによって、はじめてソーシャル・ディスアドバンテージを抱える人びとの生きづらさに肉薄することができるということではないでしょうか。ともかく、当日、立錐の余地のない会場で戦わされた白熱の議論にかんするライブ感をとどめた記録となっています。こちらも、ぜひ、ご一読いただければ幸いです。